

第1回 歴史に裂かれた「田原村」

田原村は、明治22年に彦島の名倉太郎馬らが中心となって、現在の袋井・磐田市境にできた静かな農村でした。大正14年の国勢調査を見ると、398世帯、2,159人の人口で、米・茶・甘藷・煙草を産し特に野菜の栽培が盛んでした。

村名の由来は、村内を流れる「太田川」と「原野谷川」から一文字ずつとって「田原村」と名付けたそうです。当時の田原村には、玉越、西島、三ヶ野、明ヶ島、彦島、松袋井、新池の7つの大字がありました。村の境界は、東は木原・高尾に接し、南は諸井・長溝・新貝に接し、西は西貝・大久保に接し、北は岩井・小山に接していました。

田原村では、昭和29年春頃から合併問題が持ち上がり、磐田派と袋井派の意見が対立して大騒ぎになりました。村内ではたびたび県の仲介を受けて話し合いが持たれ、昭和31年についに磐田市と合併することになりました。しかし、同時に新池・松袋井・彦島の一部は分かれて袋井市に編入する「分村合併」となり、長い村の歴史が終わりました。この頃、県内には合併に伴う騒動が各地に起こりました。静岡県人は昔から郷土を愛する気持ちがより強かったのでしょうか。(Y)

参考文献

『静岡県市町村合併沿革誌』(S317 シ)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第2回 徳川家臣の移住にちなむ「幸浦(さちうら)村」(前編)

「幸浦村」という名前を初めて目にする方が多いのではないのでしょうか。

これは、明治22年5月から昭和30年3月まで、浅羽南部の海岸地帯にあった村の名前で、地図にこそ「幸浦」という標記は消えてしまいましたが、現在でも地域住民の間では、「幸浦から来たよ」などと言って、根強く使われている地名の一つです。まずは、名前の由来から。

それは、徳川15代将軍 慶喜(よしのぶ)が1867年に朝廷に政権の座を返還したときから始まります。翌年、徳川家は駿河・遠江などの一大名として駿府(静岡市)にやってきました。これに従った多くの家臣達は無禄を覚悟に、それぞれが集団を作っては原野の開墾など、生活の糧を求めて移住し、その数は6000世帯、3万人に及びました。

その中の一つ、徳川海軍の流れをくむ運送方が製塩方として組織替えされ、1870年(明治3)に150人が湊村(袋井市湊)に集団移住して製塩事業を始めることになりました。

駿府出発の日、リーダー(頭取)の松岡萬(つとむ)は、駿府城に静岡藩庁大参事(現在の知事)であった、大久保一(いち)翁(おう)を訪ね、一翁から次のはなむけの和歌として「武士(もののふ)の競ふ綱引の海幸に、幸の浦々末栄ゆらし」を贈られます。

このとき、浅羽の海岸を「幸の浦」と詠んだことが、のちに村の名前になるとは、誰も考えませんでした。
(Y)

参考文献

『静岡縣市町村合併沿革誌』(S317 シ)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第3回 徳川家臣の移住にちなむ「幸浦(さちうら)村」(後編)

大変な投資を行ったにもかかわらず、版籍奉還、廃藩置県という大きな激動により製塩方はわずか二年後の明治5年(1872)に廃止となり、公的援助を失った旧徳川家臣達は、しだいに各地の身寄りを頼って離散することになりました。

明治になり地租改正が進むと、それまでの村では人口・面積・財政ともに小規模であったことから、税負担能力向上を目指して政府・県などの指示により村合併が繰り返されました。

海岸地帯では、明治22年(1889)に湊村・太郎(たろ)助(すけ)村・西同笠(にしどうり)村・寄木村の四村が合併し、その村名には大久保一翁が贈った和歌に詠まれた「幸の浦」が採用され、幸浦村が誕生しました。

昭和30年、浅羽地区の広域合併によって浅羽村が誕生すると、幸浦村の名前は消えましたが、「幸浦」という言葉は今も根強く残り、平成13年には一翁の孫にあたる安威氏の揮毫による、「幸の浦」の碑が建立され、その由来を後世に伝える事業が文化協会の方達と共に実施されました。(Y)

参考文献

『浅羽風土記』(S235 ハ)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第4回 荘園の名前にちなむ「笠原村」（前編）

笠原村の成立

今回から3回にわけて「笠原村」の紹介をしていきます。

「笠原」の名前は現在、小学校・幼稚園・保育園・公民館など公共機関の名称として使われ、その由来は、明治22年～昭和31年まで存在した「笠原村」の「笠原」からとっているわけです。

しかし、明治22年に成立した「笠原村」は旧大須賀町の一部にまで広がる範囲で、現在の「笠原地区」とは異なります。

成立の経緯を紹介すると、明治6年の村合併によって江戸時代に形成された、旧横須賀藩領の三輪村・三輪村枝郷の三沢新田・清ヶ谷村・石津村・小谷田新田が合併して、まず山崎村となります。

明治19年になると、横須賀外三ヶ町村組合を組織し、役場を山崎小谷田の撰要寺および石津の泰岩寺に置き、明治22年に山崎村と岡崎村が合併して独立自治体を組織して、新たに「笠原村」が成立し、役場を三輪の永徳寺に置きました。明治24年10月には現在の三輪バス停付近に笠原村役場を新築し移転しました。

この新しい村の名前として中世に存在した「笠原荘」という荘園の名称が採用されます。「笠原荘」については次回に紹介しましょう。(Y)

参考文献

『静岡縣市町村合併沿革誌(第二巻)』（S317 シ 2）

『ふるさと笠原第1集』（S234 フ 1）

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第5回 荘園の名前にちなむ「笠原村」（中編）

笠原村の成立

「笠原村」のもとになった「笠原」という名前は、九世紀頃成立した笠原(かさはらの)荘(しょう)という荘園名に由来しています。

荘園というのは貴族(含皇族)や大社寺の私有地のことで、笠原荘は馬を飼育し供給する「笠原牧(まき)」に起源を持つ荘園で、その範囲は菊川河口を中心に遠州灘にそって広がり、旧浜岡町・大東町・大須賀町・小笠町、これに袋井市笠原地区のごく一部にまで及ぶ広大な荘園でした。

はじめの頃は左大臣 源俊房(としふさ)家が家領としていたことが史料からうかがえ、その後、関白藤原頼道や平重盛(しげもり)が荘園の権利をもち、鎌倉時代には賀茂斎院(さいいん)（賀茂神社に巫女として奉仕した未婚の内親王・女王）領にと、中央貴族や社寺との関わりが常に見られる荘園でした。

近年の研究によって、この荘園の中心は菊川に沿った旧大東町中と考えられるようになり、そこには「公文(くもん)」「政所(まんどころ)」「紋誅所(もんちゅうじょ)(問注所)」という、役所の名前を示す小字も残っています。

笠原荘の鎮守は熊野三山が担い、東方を高松神社(熊野新宮)、北方を小笠神社(那智)、西方を三熊野神社(熊野本宮)がそれぞれ守護しています。この荘園名が、明治22年の山崎村と岡崎村の合併時に採用されたわけです。(Y)

参考文献

『静岡県史 通史編1 原始・古代』（S201 シ 1）

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第6回 荘園の名前にちなむ「笠原村」（後編）

笠原は浅羽荘の中心？

明治22年に行われた山崎村と岡崎村の合併時に、新しい村名として「笠原荘」の「笠原」の名前が採用されたわけですが、それから67年後の昭和31年9月に行われた袋井町との合併時には、旧山崎村のうち清ヶ谷、小谷田、横砂、石津および本谷の約210戸が袂を分ち、こちらは同年6月に新設されたばかりの大須賀町に9月に編入し、行政区域が異なっていました。

その結果、笠原地区は江戸時代の岡崎村を中心とした地域を指す名称となり、その範囲も笠原村時代の6割ほどになりました。

さて、問題は岡崎村です。この村は、平安時代後期に成立した浅羽荘のうち岡(おか)郷(ごう)(のち岡山、五十岡、岡崎にわかれた)と呼ばれる土地の中心で、浅羽荘の中でも一等地でした。

浅羽荘は摂政や関白を輩出した名門貴族、藤原氏の家政機関で、一門の子弟を養育するための大学でもある「勸(かん)学院(がくいん)」を維持するための主要財源の一つで、南北朝期の14世紀半ばには年貢として、お茶が都に運ばれ、その時の記録が残されています。これは、県内で最も古い茶栽培の記録の一つです。

古くは浅羽荘を代表する土地であったものが、隣の笠原荘の名称を名のるところなど、歴史の綾を感じますね。(Y)

参考文献

『ふるさと笠原第1集』(S234 フ 1)

『校正 郷里雑記』 八木義穂 (S230 コ)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第7回 小笠山の西からとった「笠西村」(前編)

村の成立

明治22年(1889)の町村制施行に伴い、高尾・愛野・豊沢の三ヶ村が合併して笠西村が誕生しました。その後、昭和3年(1928)に旧袋井町と合併するまでの39年間存在し、この間、地図上に明記された村でした。

先の三ヶ村は明治8年から、翌9年にかけての村統合により、江戸時代の行政範囲であった高部村と赤尾村が一つになって高尾村に、法多沢や菩提沢に面した神長村・宝野新田・菩提新田・法多村(明治7年に村となる)が一つになって豊沢村(実り豊かな沢という意味か)に、小野田村と石野村が一つになって愛野村にと、それぞれ成立したものです。

このうち高部村・小野田村は旗本渡辺家が、赤尾村は旗本室賀家が、宝野新田・菩提新田・石野村は横須賀(藩)西尾家が、法多は尊永寺がそれぞれ支配するというように、村ごとに領主が異なっていました。

特に、小笠沢川・原野谷川をかかえた高尾村では、新村成立後も出水・旱魃(かんばつ)との闘いで、年中、川さらい、溝さらい、護岸の杭打ち作業にかり出され、明治25年の小笠沢改修工事、同44年の二次改良工事を経て高尾田面(とおもん)の耕地整理が完了したのが大正2年(1913)のことでした。

成立間もない明治24年の笠西村の戸数は509戸、人口2,499人という規模で、役場は小野田7番地に置かれました。(Y)

参考文献

『ふるさと袋井南第1集』(S234 フ)

『笠西小史』(S234 カ)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第8回 小笠山の西からとった「笠西村」（中編）

小笠山とのかかわり

笠西村の地名は小笠山の西という位置関係から、採用されたといえます。では、どれくらい、深いかかわりを持っているのでしょうか？

小笠山の最も標高の高い地点には小笠山の守護神である天狗多聞天(たもんでん)が祀られています。

多聞天は、室町時代に浅羽地区旧柴村の河村家出身の小太郎という子供が修行を積んで天狗になったと伝えられており、かつては、河村家の当主が秋の大祭に出向かないと、小笠神社の神事が始められませんでした。

笠西村内の法多の領主は尊永寺で、江戸時代には205石の朱印地を持ち、鴨江寺に次いで、遠州で二番目の大寺院でした。この新年の祭礼に「田遊び」があり、芸能を行って、神様をもてなします。

その演目中に「神唱(かみとな)え」と言って、神事が無事とり行われるように「八百万(やおよろず)」の神々を呼び集める場面があるのですが、その中で、遠州一宮の小國神社から始まり、春埜(はるの)山・大尾(おび)山・日坂事(このの)任(ま)神社を經由して御前崎の駒形神社・三熊野神社から小笠山を通り、最後に尊永寺の鎮守様、白山神に至る道筋の、神や仏の名を読み上げます。

これは、平安時代末から南北朝時代にかけて、遠州中の山伏や修行僧が集まって盛んに行われた、山岳修行を物語る唱えごとで、小笠山の山神が締めくくりで、その満願の祈祷所が尊永寺であったということがわかります。

江戸時代以降は、小笠山は横須賀藩領となり、南の土方(ひじかた)地区との結びつきが強くなりますが、それ以前は、むしろ、法多沢を登る西側ルートが中心であり、ここで紹介した二つの事例がそれを物語っています。現在もこの小笠山への道筋は、ハイキングコースとして利用されています。(Y)

参考文献

『遠江古蹟図絵』(K291. 5 ト)

『しずおかの文化 91 号』

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第9回 小笠山の西からとった「笠西村」（後編）

笠西村の繁栄と袋井町との合併

明治22年(1889)、市町村制が公布され笠西村が誕生した同じ年の4月16日に、東海道鉄道の静岡浜松間が開通し、袋井駅が開業します。この開業によって、「まち」の中心は、それまでの宿場町から駅前に移りました。

駅ができると、近隣の村々に旅客や貨物を運搬する道路を造る必要が生じ、特に、駅から静橋(当時は木造の有料橋として維持していた)に至る広い道を造ることが緊急課題となり、幅五間(約9メートル)の西通りの建設が決まり、その費用を笠西村・袋井町で半分ずつ負担しました。

駅前の西通り、東通りが開通すると、近隣の村々から人々が集まり、急速に商店街が形成されます。ワシズ屋・山梨屋・木原屋・甲州屋といった、出身地を屋号にした店が多かったことから、その辺の事情を伺うことができます。

駅前の新興地の発展によって、合併前の笠西村は人口5,386人、戸数1,048戸と大幅に増加します。これに比べて袋井町は人口3,186人、戸数627戸と、人口では笠西村がかなり多く、活気がありました。

昭和にはいると国の方針に基づく合併が進められます。しかし、袋井町には東海道五十三次の宿場としての長い歴史に対するプライドがあり、笠西村には袋井駅を持っているという誇りがあり、協議は困難を極めましたが、紆余曲折を経ながらも、昭和3年12月15日に笠西村と袋井町の合併が行われました。

合併の「協約」によると「合併後の名称は袋井町とし、役場の位置は笠西村役場とする。」となっています。一方は名をとり、一方は実をとるという、ギリギリの妥協点を見いだしての合併が行われたようです。こうして、笠西村の名が地図の上から消えてゆきました。(Y)

参考文献

『ふるさと袋井南 第一集』(S234 フ)

『東海道と袋井宿』(215.4 ト)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第10回 「笠原村 開拓」

小笠山開拓団の痕跡

何かネタはないかと、昭和33年12月28日に発行された『国土地理院2万5千分の1地形図「袋井」』を見ると、笠原村のうち三沢川に沿った三沢集落の奥に奥三沢の集落があり、さらに遡った谷の一番奥、標高80mの付近に「開拓」という地名が記されていることに気がきました。細かく見ると、なだらかな谷は切り拓かれ、七棟分の建物が標示されています。いったいどのような経緯をたどった地域なのでしょう。

終戦直後の混乱のなか、食料増産は国の最重要施策とされ、県下では旧軍用地、国有林、その他国有地、民有地において開墾可能地として64団地が選定されました。現在の袋井市域では旧小笠山御料林の一部を開拓地に設定し、昭和21年に入植者の公募と指導がはじめられました。

応募者は小笠郡下の大東町、小笠町、大須賀町他各町村出身の二、三男や縁故引揚者が中心で、51戸が旧笠原村山崎の本谷を拠点にして、近江ヶ谷、菩提地先を中心に分散し、昭和22年3月に本谷において鋤入れ式が行われ、本格的な開墾が始まりました。

当初の住居は丸木の掘立小屋で、壁は板壁、屋根は杉皮葺きにランプの生活という厳しいもので、生活用水も山の湧き水に頼る状態でした。何戸かは厳しい入植生活に耐えきれず、脱落しました。その後昭和24年になってようやく本谷地域に待望の電灯が敷設されています。

昭和31年9月に笠原村と袋井町の合併が行われたとき、本拠の本谷地区は大須賀町へ、近江谷地区は袋井へと分村合併することになりました。(Y)

参考文献

『国土地理院発行 1:25000 地形図「袋井」』(S291.0 フ)

『ふるさと袋井 第9集』(S234 フ 9)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。

第11回 「西浅羽村 一ノ池新田」

旧原野谷川のなごり

大日本帝国陸地測量部が大正九年二月に発行した地形図の西浅羽村に「一ノ池新田」という地名が記され、現在の地名でいうと、浅岡八幡地区の東側にあたります。

これは明治初期から同22年にかけて西浅羽地区に実在した村の名前で、明治22年に浅岡村・富里村・長溝村・中村が合併して西浅羽村が誕生すると、同村の大字として残りました。

この名前が成立した背景には、大変なドラマがあります。室町時代から戦国時代にかけての原野谷川は、彦島・松袋井・八幡・長溝・中村・富里などの集落の中や縁を蛇行して流れ、たびたび洪水を起こしていました。

関ヶ原の戦いが終わり、徳川氏が政権を握ると、遠州の海岸平野では大規模な治水事業が始まり、原野谷川の河川改修も行われました。このとき、新たに川筋を掘り直し、太田川と合流させ、両河川は真っ直ぐ遠州灘に注ぐという、現在の流路が完成します。慶長9年(1604)のことです。

この時、旧流路は塞がれて池となり、北から一の池、二の池(中村)、三の池(富里)という細長い池が誕生しました。原野谷川が西に移動すると、旧流路に沿った部分の自然堤防上には集落が移動して八幡村・長溝村・中村・鳥羽野村が成立し、周辺の低地は水田として拓かれ、三つの池も灌漑用として当初は利用されましたが、次第に埋め立てて水田に変わり、「一の池新田」が誕生したわけです。

八幡村の東に新たに誕生した集落は、明治元年に独立して「一ノ池新田村」として成立しましたが僅か20年ばかりで消滅し、その後は地名標記として残ったものの現在ではそれも変わり、実際の池のあった一段低い田圃の部分に小字「一の池新田」として地名が残っています。(Y)

参考文献

『二万五千分の一地形図濱松近傍三号豊橋四号見付ノ二』(S291.0 フ)

※袋井市の歴史を調査研究の場合は、袋井・浅羽図書館の郷土資料コーナーをご利用下さい。